

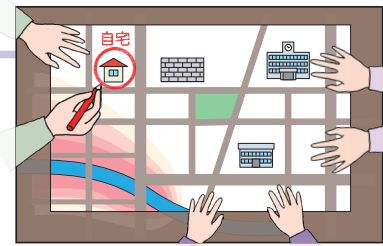
普段からの備え

ハザードマップの使い方

このハザードマップには、普段から災害リスクを認識したうえで、自分が知っておくべき「危険箇所」、「避難所」、「避難経路」、「家族との連絡方法」などの必要な情報を書き込んで、「自分だけのハザードマップ」を作成しましょう。

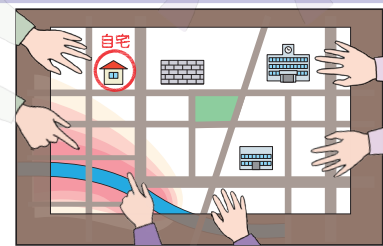
1 自分の位置を確認する

まず、自宅の位置に印をつけましょう。



2 浸水や土砂災害などの危険な場所を確認する

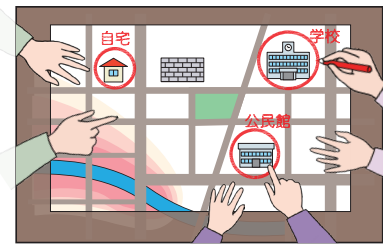
洪水による浸水被害や土砂災害が想定される範囲は、地図面に色分けして表示されています。自宅周辺でこれらの危険な場所を確認してください。



3 避難する場所を確認する

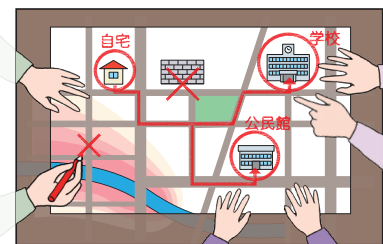
地図には町の避難所が記載されています。自宅から最寄りの避難所の「位置」と「名前」のほかに、どのような災害が起こった時に避難できるのか確認しておきましょう。

※災害の種類によっては利用できない施設があります。



4 安全な避難経路を考える

自宅からの最寄りの避難所(3で決めた場所)までの避難経路を考えて書き込んでおきましょう。その際にできるだけ「浸水の危険性がある場所」や「ブロック塀等の危険な場所」を避けて設定しましょう。



5 災害時の対応の仕方を話し合う

「自宅周辺の危険箇所」、「避難所」、「避難経路」、「避難の仕方」などについて、家族やご近所の方とあらかじめ話し合っておきましょう。危険が迫った時、自ら避難できる様にしておくことが重要です。

また、支援が必要な方の避難支援や避難の手段などについて話し合っておくことも重要です。



6 自分たちの目で避難経路を確認する

2から5までで確認した避難所や避難経路について、実際に家族や近所の人たちと歩いてみましょう。

その際に施設や避難経路の安全性や注意点を確認して記録しておきましょう。



7 非常時持ち出し品を準備しておく

「非常時持ち出し品リスト」を参考に、避難するときのために持ち出し品について話し合い、必要なものを準備しておきましょう。



地域の防災対策

自助・共助・公助の連携(相互協力)

自らの身は自ら守ることで。主に事前の防災対策から、他人に頼れない発災時に、災害での命を左右するのは、自助努力にかかっています。

個人や一家庭の力だけではどうにもならない状況において隣近所同士で助けあうことです。特に、発災直後から避難や後片付けの段階では、必要となります。

自助

自分や家族

- 家具の固定、住まいの耐震化
- 飲料水、食料品の備蓄 など

共助

隣近所、自主防災組織、災害ボランティアなど

- 防災訓練の実施
- 地域に住む要配慮者に対する支援 など

公助

市区町村、都道府県、国、消防、警察、自衛隊など

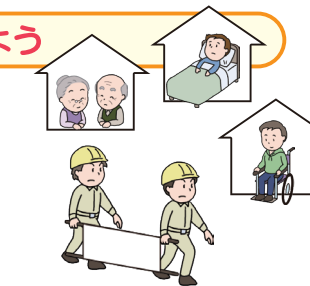
町民の力では、どうにもならない状況での最後の受け皿といえるでしょう。避難所運営をはじめ被災生活から、仮設住宅や給付金など、生活再建段階で力となります。

- 防災対策の推進
- 自助、共助に対する支援 など

要配慮者のために

災害のとき支援が必要な人に優しく接しよう

突然起きる災害のときに、大きな被害を受けやすいのは要配慮者と呼ばれる人たちです。要配慮者とは、高齢者や子ども、障がいのある人、外国人など配慮が必要な人たちのことです。いざというときは地域のみんなで協力して要配慮者を支援しましょう。



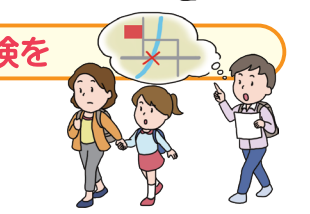
高齢者・病人

あらかじめ支援者を決め、複数人に対応し、車いすや担架を使うほか緊急時はおぶって避難します。



要配慮者になったつもりで防災環境の点検を

目や耳の不自由な人や外国人に向けた警報・避難方法が正しく伝えられるのか、放置自転車などの障害物は無いかなど、日ごろからの点検が大切です。



目の不自由な人

まずは声をかけ、誘導するときは腕を貸してゆっくりと歩きます。できるだけ状況を言葉にして伝えましょう。



避難するときはしっかり誘導する

一人の避難行動要支援者*に複数の住民が支援していきながら、具体的な救援体制を決めておきましょう。隣近所での助け合いがとて大切で。*要配慮者のうち、避難する際に特に支援が必要な方を避難行動要支援者といいます。



耳の不自由な人

お互いに顔が向き合う形で、大きく口を動かして話しかけます。伝わりにくい場合は、身ぶり・筆談で伝えます。



困ったときこそ温かい気持ちで

非常時こそ、不安な状況に置かれている人に優しく接することが大切です。困っている人や要配慮者には思いやりの心を持って支援しましょう。



車いす利用者

階段では2人以上で援助し、昇りは前向き、降り後は後ろ向きに移動します。1人の時はおぶって避難します。



日ごろから積極的なコミュニケーションをとりましょう

災害のときに円滑な支援活動をするために、日ごろからコミュニケーションをとっていることがとても大切です。



旅行者・外国人

孤立させないように話しかけます。通じない場合は、身ぶり手ぶりで伝え、道順などは手で方向を示します。

